

うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 21



古代の風を感じる大王の杜
前方後円墳の雄大さを体感

高槻市西部にある史跡今城塚古墳は、学術的には継体天皇（聖徳太子の曾祖父に当たる）の真の陵墓といわれています。

宮内庁が天皇陵と指定している古墳では、周りを柵で囲み、容易に中に入れません。今城塚古墳は古墳の中に立って、淀川流域最大の前方後円墳（9ヘクタール）の雄大さを身体で感じることができます。



大王の杜」としてオープンしました。歴史館では、大王墓・今城塚についての10年間にわたる発掘調査の成果や、高槻を中心とした古代の歴史を学ぶことができます。

直接手でさわれる 埴輪の群像

特に注目されるのは、古墳北側の堤上にある埴輪祭祀場です。日本最大の家形埴輪をはじめ人・動物など様々な復元埴輪が展示されていて、直接手でふれることができます。

市民ボランティアによる親切な案内や体験学習、古墳公園でのライブコンサートなど、古さと新しさが一体となった市民に親しまれ愛されるアミューズメント・ミュージアムをめざしています。

- 今城塚古代歴史館・高槻市郡家新町48-8
- JR京都市線「摂津富田駅」より市営バス「南平台経由奈佐原行き」で、「今城塚古墳前」下車、徒歩すぐ
- 開館時間：10時～17時
- 休館日：毎週月曜・祝日の翌日など
- 入館料：無料（特別展・企画展除く）
- TEL：072-6821-0820
- 古墳公園 入場自由

Culture Navi かるちがーなび

驚き、さらに驚き、そして怒り 真面目に働いてきて、こんなことで「処分」!

「思想調査アンケート」裁判原告59人の決意

スタンダップ

No.10 大田 良子さん



任意でない「アンケート」でなぜここまで問われるのか？

私はまず、このアンケートが任意ではなく、絶対に応じなければならないこと、応じなければ処分もありうる、という点に驚きました。

さらにアンケートの内容を見て驚きは増えました。特定の政治家を応援する活動をしたことがあるかとか、誰かに選挙の投票依頼をされたことがあるか、など、ここまで設問するか？と驚きを通り越して怒りがわいてきました。

廃棄されても悔しさは消されない

だからアンケートに応じる気はまったく起きなかったし、それで処分するならしてみろ、と開きなおっていましたが、不安がいつまでも付きまといました。

ただ、真面目に働いてきたのに、こんなことで処分されるのは理不尽だ、と強く思いました。アンケートは廃棄されましたが、この腹立たしさは消えません。その悔しさを裁判で晴らしたいと思っています。引き続きのご支援、よろしく願います。

「スタンダップ」はシンガーソングライターのかわさきゆたかさんが作曲した「思想調査アンケート裁判」の応援歌です。

「16」シリーズが「えい」が



「真夏の方程式」

人気推理作家の東野圭吾の作品。物理学者で名探偵の湯川学が活躍するガリレオシリーズで、映画化は「容疑者Xの献身」について2作目。美しい海に貴重な生物が生息する海辺の町。しかし、この町では海底資源の開発をめぐる、開発か自然保護かで住民が二分していました。開発を進める企業の住民説明会にガリレオこと湯川学もアドバイザーとして招かれます。湯川が宿泊する旅館の娘は開発反対派の象徴的な女性でした。そして、その旅館の客で、元警視庁刑事の男が岩場で死体となって発見されます。旅館を経営する一家には秘密がありました。探偵ガ

海辺の町を舞台に ガリレオの推理が冴える

リレオが複雑にからんだ事件の謎と一家の秘密に迫ります。

ガリレオとその旅館で夏休みを一緒に過ごすことになった少年とのやりとりもおもしろく、引き込まれます。「進むべき道を見極めるためにあるのが科学」というメッセージを少年に残すのも湯川学のポリシーです。この少年も事件の重要なカギを握っています。福山雅治さん演じるガリレオの科学の話、身近な科学実験も見どころの一つです。

数あるガリレオシリーズの中でも、人気の高い作品の映画化です。原作と合わせてどうぞ。上映時間は129分。

アンディ・マレーの優勝がこの国全体にどれだけの意味があるか理解していません。彼の受ける重圧も分かっていたつもりです。ノバク・ジョコビッチ（プロテニス選手）

テニスのウィンブルドンで77年ぶりに地元英国人覇者となったマレーに決勝で敗れたジョコビッチの試合直後のインタビューの言葉です。マレーの他の選手とは異なる、英国人ならではの事情を思いやるコメントを發しました。彼の決勝で敗れたときのコメントは常に清々しく、毎回心を打たれるものがあります。敗者でありながら、対戦相手を気遣うこの言葉に会場は拍手に包まれました。

心に響くこのひとこと

かっ
● 渴すれども
● 盗泉の水を飲まず
● 陸機(西晋の文学者・政治家・武将)

「どんなにのどが渇いても、「盗泉」と名のつく泉の水は飲むわけにはいかない。「盗泉」は山東省泗水(しすい)県にある泉の名です。その昔、孔子が通りかかったとき、のどが渇いていたけれども、その名を嫌い泉の水を飲まなかったとされる伝説を、西晋の詩人・陸機(261年-303年)がふまえてうたったもの。詩集「文選」に収められた「猛虎行」の一節で「熱けれども悪木の陰に息(いこ)わず」と続きます。